

〔研究ノート〕

『オーウェル著作集』全四巻（平凡社）

翻 訳 点 検

— その 3 —

西 村 徹

〔前号補遺〕

前号の最末尾、「オーウェル氏はまた知識人狩りをやっている」（“*Mr Orwell is intellectual-hunting again*”）とするカンフォートに対してオーウェルが回答しているところ、

私は今にいたるまで「知識人」もしくは「インテリゲンチャ」なるものを攻撃したことはない。私自身、膨大なインクを使って、イギリスにはびこっている一連の文学的徒党を攻撃することによって非常に傷ついている。
(pp. 216~217)

このくだりについて、いくつか注文をつけながら、最後の「非常に傷ついている」(done myself a lot of harm) という翻訳表現については一言も触れずじまい。しかし、このまま終るものとして独立させて、これを見ると、いかにも浮いて気になるところ。「傷ついている」などと、青二才が泣きをいれているような、こんな演歌まがいの物言いは、およそオーウェルにはそぐわぬものに思えて気に懸かる。自己憐憫ほどオーウェルから遠いものはない。それよりも原文が用いているのは do harm であって hurt ではない。どうして私はそれにひっかからずに見過ごしにしてしまったのか。じつは、この後に「それは、彼らが知識人だったからではなく、正確には、彼らが私のいうところの真の知識人ではなかったからである。」と続いているからで

あった。原文では、文そのものが終わってもいず、コンマで区切ったあと not because they were intellectuals but precisely because they were *not* what I mean by true intellectuals. と続いている。続けて読めば、「傷ついている」には多少の違和感は当然残るとして、かならずしも感傷の水準にとどまる表現ではなく、戦いに不可避な被害状態の即物的表現として了解できぬでもなかったからである。しかし、いずれにせよ、決してほめられた訳ではないので、さらにいくらか手を加えて、あらためて私訳を掲げておく。

私は今にいたるまで「知識人」もしくは「インテリゲンチヤ」なるものをひとからげにして攻撃したことはない。私はずいぶんと書きまくり、そのため、こちらも、ずいぶん火の粉を被って、つぎつぎ現れてはこの国を毒してきた文学的徒党に攻撃を加えてきた。それというのも、彼らが知識人だったからではなく、まさしく彼らが私のいわんとする真の知識人ではなかったからにほかならぬ。

傍点は原文のイタリックに対応している。

(前号補遺了)

vol. 2. 47「文学と左翼」(pp. 277~279 : Literature and the Left, pp. 292~294) の第三段落はじめに

「^{ハイブロッ}知識人」——すなわち、技巧的実験を試みる作家や芸術家——に対する態度に関し、左翼は右翼よりも好意的ではない。^{ハイブロッ}「知識人」とは、『デイリー・ワーカー』でも『パンチ』でもほとんど同様にみられる悪口であるばかりでなく、正確には、独創性と、マルクス主義空論家たちのえり抜いた攻撃に耐えるだけの力とを示す作品を書く作家たちをもさす。 (p. 277 : 下線部筆者)

For it should be noted that in its attitude toward “highbrows” — that is, towards any writer or artist who makes experiments in technique — the Left is no friendlier than the Right. Not only is “highbrow” almost as much a word of abuse in the *Daily Worker* as in *Punch*, but it is exactly those writers whose work shows both originality and the power to endure that Marxist doctrinaires single out for attack. (p. 292)

1は、no と not の使い分けというイロハのところで間違ってしまったが、「左翼も右翼に負けずおとらず、まったく好意的でない」ということは、左翼の『デイリー・ワーカー』と右翼の『パンチ』も同様に手きびしい、とすぐ続いて言っているのだから分かりそうなもの。もっとも『デイリー・ワーカー』がどんなもので『パンチ』がどんなものかも知らないのではどうしようもないが。もうひとつ、この文には it should be noted that があることを忘れてしまっては困る。「注目すべきことながら」ぐらいは文頭に書き添えてもらいたい。

2は、but it is exactly とあるところの it は何を指すものと訳者は受けとったのであろうか。また the power to endure に続く that の節を、完結したものとして endure の目的語のようにしているが、それならば single out の目的語がなくては困るわけで、これは it is exactly ~ that ~ でしかなかろう。すると訳はまったくちがってきて「まさしく、独創性と、時にも耐えるだけの力量と、いずれをも示す作品を書く作家たちこそが、マルクス教条主義者らの狙いうち攻撃にさらされるのである」ということ。

次の段落末尾の「政治文学的批評」は politico-literary criticism の訳語としては「政治主義文学批評」とでもする方が紛らわしくなかろう。

次の段落、

しかし、「よい作家」と「悪い作家」を論じはじめると、人はすぐに、

暗々裡に文学伝統に訴え、こうして、全くちがった方向の価値に引きずられていく。 (p. 278 : 下線筆者)

But as soon as you start talking about “good” and “bad” writers you are tacitly appealing to literary tradition and thus dragging in a totally different set of values. (p. 293)

下線部分は「なにか全く違った価値体系を引きずりこもうとする」であろう。a . . . set of values と「価値」は複数なのに「一方向」は苦しいし、「引きずられ」と受身になっていない。drag in は他動詞句であろう。

また、一文おいて

だがシェイクスピアには、反動的傾向がある。たぶん当時の基準からみてもそうだったであろう。しかもまた、彼はむずかしい作家であるが、なぜか一般の人には好かれている。 (p. 278 : 下線筆者)

Yet Shakespeare is, and perhaps was even by the standards of his own time, reactionary in tendency; and he is also a difficult writer, only doubtfully accessible to the common man. (p. 293)

下線部の「なぜか」は doubtfully のことらしい。そうとでも無理に当てはめて考えないと、なぜこんな訳になるのか見当がつかぬ。「一般の人にとって取っつきやすいかどうか、はなはだ怪しいものである」ということではないのか。

次の段落で「トルストイがスターリンよりもすぐれた作家であること」(p. 278 : that Trotsky is a better writer than Stalin, p. 293) などと、書き間違いにせよ、あるいは印刷間違いにせよ、トロツキーをトルストイにしてしまうとは、いくらなんでもひどすぎるだろう。この出版社には編集者は

いるのだろうか、とってしまうような、これに類する箇所が多すぎるようだ。

54「戦争犯罪人はだれか」（pp. 307～313 : Who are the War Criminals? pp. 319～325）の冒頭、

明らかに¹、ムッソリーニの崩壊はヴィクトリア朝のメロドラマそのままの物語である。ついに「正しき人」が勝利を得、悪人は敗北し、神の御手²は御心のままに動かしたもうたのであった。（中略）そして一方、彼を裁く³と思われている人々のだれからも、きびしい反対を受けることになったムッソリーニの国内制度に、何か特徴はないのか？（p. 307 : 下線筆者）

On the face of it, Mussolini's collapse was a story straight out of Victorian melodrama. At long last Righteousness had triumphed, the wicked man was discomfited, the mills of God were doing their stuff. . . And, on the other hand, is there any feature in Mussolini's *internal* régime that could be seriously objected to by any body of people likely to sit in judgement on him? (p. 319)

1は「見たところでは」とか「表面上は」がよかろう。2は、Though the mills of God grind slowly, yet they grind exceeding small.（天網恢々疎にして漏らさず）から来ていることを、訳者は当然承知の上であろうと思う。そうであるからには、この訳は適訳というには程遠かろう。また「御心のままに動かしたもうた」では何を「動かしたもうた」のかは分からない。どちらにしても不明瞭な訳ということになる。「神の正義に手抜きはなかった」のである。3は相当にひどい筋違いである。that 以下のような「ムッソリーニの国内制度」ではなくて、ムッソリーニの国内体制には that 以下に価するような特徴が（「ないのか？」ではなくて）「あるのか？」である。筋違いをもとに戻して言語を整えると「ムッソリーニの国内体制には、彼を

裁くことになりそうな人々のだれによるにせよ、きびしい反対を受ける可能性のあるような、なんらかの特徴はあるのか？」となろう。

次段落冒頭

比喩の目的で「キャシアス」氏は、ムッソリーニが告発者である検事総長と共に、イギリスの法廷に告発されていると想像する。(p. 307)

For the purposes of his allegory “Cassius” imagines Mussolini indicted before a British court, with the Attorney General as prosecutor.
(p. 319)

ほとんど原文を掲げるまでもない、日本語運用の巧拙が問題になる文章である。「ムッソリーニが告発者である」と読んでしまって、たとえ一瞬にせよ読者は躓く。せめて「ムッソリーニが」のあとに読点でも打っておけば読者は助かる。それよりも「ムッソリーニが」を「検事総長と共に」のあとにまわしたならば、うんとよくなる。ほかにも方法はある。「ムッソリーニが告発されてイギリス法廷に出廷しており、検事席には法務総裁が座っていると想定する」とでもしようか。

まったく同じことが、次の場合にも言える。

私は心からの満足をもって、ムッソリーニの輝かしい業績を正しく評価させることのできた、社会的影響力のある立場にいる最初の人間であったといえる。(p. 308)

I can claim with sincere satisfaction to have been the first man in a position of public influence to put Missolini’s splendid achievement in its right light. (pp. 319~320)

これなども、なぜ「心から満足をもって」のあとに「私は」を持ってこないのかと思う。それよりも「心からの満足をもって」を、うんと後ろの、副詞として直接に修飾すべき「いえる」の前に直結したらいいではないか。「心からの満足をもって言いきることができる」とすれば締まるのではないか。

少し先にいって「それはただ、ムッソリーニが、ヒトラーとくみする要のないほど強力であることによるのみ可能だったのだろう」（p. 309）の原文は *It could only have been done by being so strong that Mussolini would not dare to side with Hitler.* (p. 321) 煩わしいので文脈が納得できるほどの引用を避けたが、要するにムッソリーニを買収して枢軸から抜けさせるというイギリス側戦略は到底無理であった。なぜ無理であるかを述べているのが上掲の文。これだとムッソリーニが強力であれば可能という意にとれる。ムッソリーニのあとにわざわざ読点があるから、なおさらそうしかとれない。これはそうではなくて「ムッソリーニがヒトラーとくみする勇氣も出ないほど、我が方が強力であることによるのみ可能だったろう」ということ。

さらに進んで

これに対し、右翼を攻撃するが、左翼にへつらわぬことこそ、パンフレット筆者のつとめであろう。ある点では、左翼が現在いる場所にあまりにも容易に満足しているからである。（p. 311）

Meanwhile it is a pamphleteer's duty to attack the Right, but not to flatter the Left. It is partly because the Left have been too easily satisfied with themselves that they are where they are now. (p. 323)

前半きわめて拙劣。後半完全誤訳。前後合わせて支離滅裂。訳し直すと、

ところで、右翼を攻撃するのはパンフレット筆者のつとめであるが、左翼にへつらうことであってはならぬ。ある点で、左翼はあまりにたやすく自己満足してしまっているから、こんなていたらくなるのだ。

もうひとつ最終段落に「ヒトラーについては、いよいよの時、逃亡も降伏もせず、とにかく自殺によっておそらくオペラもどきに死ぬだろうと常に言われている。だが、それはヒトラーの成功した時であろう」(p. 312)とあり、最後の文だけ原文を記すと、But that was when Hitler was successful; (p. 324)。ここは「そう言われたのもヒトラーがうまくいっていた時のことだ」がよかろう。

* * *

vol. 2について、これまでにとり上げたような大物はもはやない。あとは落ち穂を拾うように、些細な手直しが大方となろう。

56「詩とマイクロフォン」(pp. 317~324 : Poetry and the Microphone, pp. 329~336)の第二段落「われわれのいつも従った方式は、月刊文芸誌と限定されるものを放送することだった」(p. 318)とある。What purported to be a monthly literary magazine (p. 329)は「月刊文芸誌と称されるていもの」が妥当であろう。また「編集スタッフはオフィスにすわって、次号に載せるものについて討議していると仮定される」(下線筆者)は原文のThe editorial staff were supposedly sitting in their office, に照らせば「という想定である」がよかろう。「このような番組は、必然的にいくらかぼやけたもの」(下線筆者)も shapeless はむしろ文字どおりに「形の定まらぬもの」であろう。

次段落末尾「ただここで、ラジオ特有の長所、正しい聴衆を選ぶその能力、舞台負けや気おくれをなくすることが、注意さるべきだろう」(p. 319 : But the special advantage of the radio, its power to select the right audience,

and to do away with stage-fright and embarrassment, ought here to be noticed. p. 331) も一工夫して「ただここで、ラジオ特有の長所、適切な聴衆を選ぶことができ、舞台負けや気おくれをなしですますことができるという、ラジオの力は注目さるべきであろう」ぐらいまで持ってゆきたい。

次の段落では、実際の演壇では聴衆の反応が二三分もすれば分かるから「だから実際のところ、ほとんど、そこにいるいちばん鈍い人間と判断されるもののためにしゃべり、しかも、『人格』として受け取れる大ボラによって気に入られるようにせざるを得なくなるのである』(p. 320 : 下線筆者)とある。下線部分の原文 and also to ingratiate yourself by means of the ballyhoo known as “personality”. (p. 332) に照らせば、「しかも『持味』というが、じつははったりで、気をひかざるを得なくなるのである」というところではなかろうか。

次段落終り近くに

われわれの住んでいるこの醜悪には精神的・経済的理由があり、ある点、伝統の単なる逸脱に過ぎないと言い抜けることはできない。(p. 321)

The ugliness amid which we live has spiritual and economic causes and is not to be explained by the mere going-astray of tradition at some point or other. (p. 333)

こまか過ぎると思われるかもしれぬが、このままではどうにも居心地が悪い。「われわれの住んでいるこの醜悪」というのも日本語として奇妙だし cause は「理由」ではないだろう。また at some point or other を「ある点」というだけでは足りないだろう。ここはやはり「われわれを取巻いている醜悪さには精神的、経済的原因がいくつかあって、ただどこかで、伝統があらぬ方に逸れてしまったというだけで説明しきれるものではない」というところであろう。

ひとつおいて次の段落、

私は先にラジオをより有望な媒体であると言ひ、特に詩人の見地から、その技術的長所を指摘した。そのような提議も、¹ ちょっと聞いただけで絶望的に思われる理由は、ほとんどラジオが、よほどの駄作でないかぎり何事であれ宣伝に用いられることが、想像できぬことにもとづこう。人々は、現に世界中のラウドスピーカーから流れてくるものに耳を傾け、無線の存在するのはまさにそのゆえにほかならぬと結論する。実際、²「無線」という言葉そのものから、獅子吼する独裁者か、わが国の飛行機が三機、帰還できなかったことを、気取ったしわがれ声が知らせる光景が思い出される。³ 放送される詩は、しまのズボンをはいたミューズの神々のように聞こえる。それでも、⁴ 機械の性能とそれが実際に使用される効果とを混同してはなるまい。⁵ 放送がそれだけのものにしか過ぎないのは、マイクロフォンやトランスミッターの全装置にどこか固有の低級な、ばかばかしい、不正なものがあるからではなく、現在世界中に現れているあらゆる放送が、現状を維持すること、したがって一般民衆をあまり聡明にさせないようにすることに積極的な関心をいだいている、政府や大独占企業の支配下にあるためである。 (p. 322 : 下線筆者)

I have suggested the radio as a more hopeful medium, and I have pointed out its technical advantages, particularly from the point of view of the poet. The reason why such a suggestion sounds hopeless at first hearing is that few people are able to imagine the radio being used for the dissemination of anything except tripe. People listen to the stuff that does actually dribble from the loudspeakers of the world, and conclude that it is for that and nothing else that the wireless exists. Indeed the very word "wireless" calls up a picture either of roaring dictators or of genteel throaty voices announcing that three

of our aircraft have failed to return. Poetry on the air sounds like the Muses in striped trousers. Nevertheless one ought not to confuse the capabilities of an instrument with the use it is actually put to. Broadcasting is what it is, not because there is something inherently vulgar, silly and dishonest about the whole apparatus of microphone and transmitter, but because all the broadcasting that now happens all over the world is under the control of governments or great monopoly companies which are actively interested in maintaining the *status quo* and therefore in preventing the common man from becoming too intelligent. (pp. 334~335)

いささか長い引用になったが、それというのも文脈理解の必要上、第一文の最後の文を割愛できなかったためである。したがって第一文と最後の文は技術上の問題点があつての引用ではないことをことわっておく。第四番目の文も格別問題はない。結局下線部分に問題はあるのだが、それらとて、いちいちの置き換えられた日本語に大きく原語と乖離するところもない。文章の筋が外れているということもない。にもかかわらず、どうにも気持ちよく文章が通らないのはどういうわけだろうか。例えば下線1の「そのような提議」は上の「私はラジオをより有望な媒体であると言」ったことであろうが、「ちょっと聞いただけで絶望的に思う」のは誰なのか、この文章からは、いまひとつはっきりとは浮かびあがってこない、というようなところが至るところにある。文章全体の音像とでも言うべきものが、じつに曖昧というほかない。「そんなことを言ってみたところで、聞くが早いのか、お話にもならぬ提唱のように人から思われてしまうのは、ラジオというものが、よほどの駄作でないかぎり、どんなものの宣伝にも用いられているのだと想像できる人がほとんどいないからだろう」とでもすれば、少しは輪郭がはっきりするだろうにと思う。元の原文がストイックで贅肉のない、筋肉質のものであるとき、それをぶっきらぼうに即物的に言葉を置き換えて、訳文も原文同様の文

体を写しとった気になっていると、こういうもどかしさが生じる。文体は少々犠牲にしても、各所を増幅したりして読者が文章の流れに乗れるように配慮するのが訳者の役割であろう。

下線2の「そのゆえにはかならぬ」の「その」が、一読して「現に世界中のラウドスピーカーから流れてくるもの」のことだと分かるだろうか。「そのゆえに」は、ただ「だから」というのとほとんど変わらない、接続詞みたいな意味の弱い言葉にも受けとられてしまうおそれがある。for that and nothing else は、そんな脆弱な語句ではあるまい。先立つ「流れてくるもの」も stuff を簡単に「もの」などと片づけしないで、きっちり「流れてくる素材」としたうえで「まさにそういう素材のためにのみ無線^{ワイヤレス}は存在するのだと思いこんでしまう」とすれば、「素材」という語を繰り返すことによって、めりはりが利いてこないだろうか。

下線3, Poetry on the air はたしかに「放送される詩」だ。それにはちがいないが、このところをいくら繰り返して読んでも、どこか違うという、拭っ切れない気持は残る。原文を読む、訳文を読む、いくら繰り返しても落ち着かないのだ。前後のつながりからいって、いま一步踏みこんで「詩を電波に乗せるなどという、芸術の女神たちがしまのズボンをはいて出てくるように思える」で落ち着きはせぬだろうか。つまり元々の訳よりも on the air の方に訳のアクセントを移してやることで落ち着きはせぬだろうか。翻訳も一種の細工仕事なのだから。

下線4は、これは本来の意味とかなりずれるところがあるだろう。「一つの機器のもつ可能性の全体と、それが現実に使われている使われ方とを混同してはなるまい」であろう。下線5も同断で、「放送のありていは」ということであろう。

次の段落「しまのズボンをはいた連中は支配する。が、彼らがインテリゲンチャを支持せざるを得ないかぎり、インテリゲンチャにはある範囲の自主性が許されるだろう」(p. 323: 傍点筆者)の「支持」は原文では maintain だから当然「温存」でなければ文意も通るまい。

* * *

「戦時日記」(War-time Diary) の中の、1941年3月4日の文中「この戦争が始まってからも時折、何ヵ月かおきに、ちょっとの間水の上に鼻を出して、地球が太陽の回りを回っていることに気づく」(p. 370 : 下線筆者 : Now and again in this war, at intervals of months, you get your nose above water for a few moments and notice that the earth is still going round the sun., p. 385) とある。下線部分に出くわして、おや、と思い、原文を読んで吹きだしてしまうだろう。これでは全く翻訳したことにはならぬ。日本語にはこんな成句はないからだ。「ほんの一息つくことができて」であろう。

次の3月14日の文中、「私としては、大きな敗北を喫する危険はあっても、われわれのもつすべての卵をひとつのバスケットに入れることに賛成する。¹なぜならば、狭い軍事的な意味での敗北や勝利よりも、われわれが劣勢のまま強力な敵と戦っている事実を明らかにすることの方が、²重要だと思うからである」(p. 371 : 下線筆者) I am in favour of putting all our eggs in one basket and risking a big defeat, because I don't think any defeat or victory in the narrow military sense matters so much as demonstrating that we are on the side of the weak against the strong. とある。これもまた噴飯物というに近い誤訳で、下線1は「持てる力をことごとく投入する」、下線2は「弱きを助けて強者と戦っている」である。

同じものの終り近くに「イギリスは自国の利益のためにエチオピアを攻撃しているのだ、と言われてそのまま信じられたのでは、全く困ったことになる」(p. 372 : The effect may be appalling if we let it be even plausibly said that we are swiping Abyssinia for ourselves., p. 387) とある。これは文脈上も「イギリスは自国の利益のためにエチオピアをくすねとろうとしているのだと、一応もっともとしても、言われてそのままにしたのでは、まったくひどいことになるだろう」だろう。

3月20日の文中「ドイツ軍は、われわれの送る小麦やなんかを、フランス人に与えておいて、同じだけの食料を、ほかのところに隠してしまうだろう」(p. 373 : The Germans will simply allow them to keep such wheat, etc. as we send in and withhold a corresponding quantity elsewhere., p. 387)のおしまいのところは「ほかのところで差し押さえてしまうだけだろう」ではないか。同段落末尾の「—かどうか、分かりさえすれば—。こういう連中は、みんな裏切者だ。あるいは、大馬鹿者だ」(p. 373 : If only one could be sure whether —, — and all their kind are really traitors, or only fools. p. 388)。こんな訳をするやつは「裏切者」だとも「大馬鹿者だ」ともいうまい。しかし訳者は泥酔していたにちがいない。そうでなければ、ちょっと伏字が出てきたぐらいで前後不覚になって、呂律がまわるともまわらぬともない、涎れ繰りみたいな意味不明のたわごとを書くはずがない。酔いがさめて、もし気がついていたら、首を吊って死にたくもなっていたらう。気がつかなくてよかったと思う。「何某とか何某等々の手合いがほんとうに裏切者なのか、それとも阿呆というだけなのか、はっきりしさえすればよいのだが」である。

4月23日の項、「ギリシアは片がつきつつあるらしい。オーストラリアでも、恐ろしい代償が払われつつある」(p. 381 : The Greeks appear to be packing up. Evidently there is going to be hell to pay in Australia. p. 396)。たしかに「ギリシアは片がつきつつある」のでもあるが、「ギリシア」といっても、ここは原文が Greece ではなくて The Greeks なのだから機械的に「ギリシア人」とか「ギリシア国民」とは言わぬまでも、その意味が文中につたわるように、「ギリシアはもう音をあげようとしているらしい」であろう。またギリシアに遠征した英連邦軍が旧式の装備のまま、機械化されたドイツ軍にぶつかって予想以上の打撃をこうむって敗退したという背景があって、ギリシアに兵を送ったオーストラリアでは世論が沸騰しているという事実に触れて、「オーストラリアでも大変なことになりそうだ」と言っているのだ。「恐ろしい代償が払われつつある」は、ただ表現が大げさとい

うだけで、まるで意味はさだかでない。適訳には遠かろう。

1942年4月3日の項に「彼らの子供っぽさを過大評価をしてはいけない。底知れないんだから」(p. 399 : You cannot overestimate their childishness, George, It is fathomless. p. 417) という一文がある。文脈を説明するまでもなく訳を間違えていることは原文を見ればはっきりすることだが、これはオーウェルと話し合っているアーナンドというインド人の発言である。オーウェルがインド知識人の態度について childish と言ったのに対する答えである。「彼らの子供っぽさはいくら大げさに言っても言いすぎにはならない。底知れないんだから」ということ。第一、「過大評価してはならない」と「底知れない」とは、結びつきようがないではないか。

これで、ようやく全四巻のうち第二巻の一通りの点検を終わった。ただひとつだけ付言しておく、2「書評——アドルフ・ヒトラー著『わが闘争』(全訳) p. 13 ; Review — *Mein Kampf* by Adolf Hitler (unabridged translation) は、岩波文庫の小野寺健編訳『オーウェル評論集』で、ほとんど完璧に改訳されているが、第三段落で小野寺訳は「生活空間」の語を消している。たしかにオーウェルが使っているのは“living room”だから Lebensraum に直接呼応する語ではないかもしれぬ。英語の living room は「居間」であって、それに相応するドイツ語ならば Wohnzimmer ではある。Lebensraum なら living space が英訳なのかもしれぬ。というので、はなはだ律儀に、書かれていない語は消したということなのであろう。しかし、いくらドイツ語を話さなかったオーウェルとはいえ、これくらいのドイツ語を知らぬはずもない。Lebensraum にそのまま英語を当てはめると living + room になるからオーウェルはおどけて引用符をつけて「居間」とは恐れ入るとやったのだろう。オーウェルにはその種の茶目っ気が十分にある。その間の機微を伝えるのは翻訳では到底無理だろうから、そこは諦めて、むしろ本来の「生活空間」の意を翻訳上で、ほとんど注釈に近い形ででも、とどめるようにした方がよくはなかったろうか。もっともヒトラーの原典にも、

オーウェルの読んだ英訳にも、直接あたったわけではないので、そんな気がするというまでではある。

ようやく第二巻を終った。しかしどうやら書かねばならぬことは第二巻に集中していたらしく、他の三巻は、ざっと見たところ、さほど書くべきこともなさそうである。これで打ち止めにできるのではと期待している。ほとんどが小さな手直しに過ぎぬことになろうが、それでも一つだけこれはこれだと驚くべき大物が残っている。順不同で、それをまず取上げることとする。

第四巻12の「書評——ジャン・ポール・サルトル著 エリック・ド・モーニー英訳『反ユダヤ主義者の肖像』 pp. 436~437 (Review — *Portrait of the Antisemite* by Jean-Paul Sartre, translated from the French by Erik de Mauny, pp. 452~453) という1948年11月7日の『オブザーバー』に掲載されたものがある。七百語に満たない、まことに短いものであるが、差別の問題にきわめて独創的な、かつ鋭い洞察を示している重要な一篇である。それだけに、この一篇の訳が以下に示すように、かくも杜撰なままに放置されていることは痛恨事というべきことに思われる。第四段落全体が狂ってしまっている。

いったい、なぜこういった人々は、サルトル氏が一箇所だけでしか考察していない他の犠牲者よりも、ユダヤ人を選んで非難しなければならないのか、キリストのはりつけに対して責任があったと考えられているために憎まれているのだと、古くて非常に曖昧な説を主張することによって、なぜユダヤ人をいじめるのか。サルトル氏は反ユダヤ主義を、たとえば有色人種に対する偏見のような非常に類似した現象に結びつけようとはしていない。(p. 436)

Why these people should pick on Jews rather than some other victim M. Sartre does not discuss, except, in one place, by putting forward

the ancient and very dubious theory that the Jews are hated because they are supposed to have been responsible for the crucifixion. He makes no attempt to relate antisemitism to such obviously allied phenomena as for instance, colour prejudice. (p. 452)

最後の文章に技術上の問題はない。文脈を辿る上で必要なのでここに記したにとどまる。さて、「こういった人々」とは、その反ユダヤ主義のゆえにサルトルが批判している人々である。そのサルトルが槍玉にあげている連中が「なぜ…他の犠牲者よりも、ユダヤ人を選んで非難しなければならないのか」と、この訳文のかぎりでは、オーウェルが問を発していることになる。それならば、サルトルが非難している彼らが特に非難してはいない「他の犠牲者」について「サルトル氏が一箇所だけでしか考察していない」などと、なぜオーウェルがここで言わねばならぬのか、読者はひっかからずに読むわけにはいくまい。そう問うておいて、「こういった人々」ではなくて、むしろ彼らを非難しているサルトルが、まるで彼らに呼応するかのごとくに、反ユダヤ主義を人種差別と結びつけようとせぬなどと、なぜ藪から棒に素っ頓狂なことを言うのか。そのように読者はいぶからざるをえまい。そして、オーウェルという人はじつに訳の分からぬことを言う人だと思ってしまうだろう。

ところが原文を見ると、少しもそんな訳の分からぬ文章ではないことが、すぐ分かる。訳者はこの原文を「いったい、なぜこういった人々は…非難しなければならないのか」という疑問文にとった。疑問文には疑問符をつけるのが普通だ。原文に疑問符はない。また疑問文であるためには Why these people should pick ではなくて Why should these people pick とならねばならぬ。とすると、この文全体の主部分は M. Sartre dose not discuss であって、それに先立つ部分は discuss の目的ということではありえない。そんな初歩的なことを、と言われるかもしれぬが、そんな初歩的なことを訳者は間違えているのだから仕方あるまい。この訳文を組み替えて修正すると、

いったい、なぜこういった人々は、他の犠牲者よりも、ユダヤ人を選んで非難しなければならないのか、その理由をサルトル氏は、ただ一点、キリストのはりつけに対して責任があったと考えられているために憎まれているのだという、古くて常に曖昧な説を持出すことによってしか考察していない。サルトル氏は反ユダヤ主義を、たとえば有色人種に対する偏見のような非常に類似した現象に結びつけようとはしていない。

ということになる。これは、いささかならず驚くべき誤訳というほかない。これほどひどくはないが、やはりどこかで意味を把握そこなまま、なんとなく、ともかくも日本語にしたという程度の訳例が次の段落に見られる。短い段落なので問題点のある局所に限定せず、段落全文を写しておく。

サルトル氏の研究方法の間違っている点の一部は、その表題が示している。サルトル氏は本書を通じて終始一貫、定冠詞付きの反ユダヤ主義者のことを言っているらしいが、この種のユダヤ主義者は常に、一見してすぐにそれと分かる同種の人物であり、いわばいつも活動している人である。現に、ほんの少し観察力を使いさえすれば、反ユダヤ主義が非常に広く行き渡っていて、ひとつの階級に限定されてもいないし、とりわけ、最悪の場合は別として、断続していることが分かる。(pp. 436~437)

Part of what is wrong with M. Sartre's approach is indicated by his title. "The" antisemite, he seems to imply all through the book, is always the same kind of person, recognisable at a glance and, so to speak, in action the whole time. Actually one has only to use a little observation to see that antisemitism is extremely widespread, is not confined to any one class, and, above all, in any but the worst cases, is intermittent. (p. 453)

第一文は approach の訳語が「研究方法」では大まかに過ぎるという他、格別の問題はない。これは、もはや、「接近」を定着させるべき時期に来ていると思うが、どうしてもと言うのなら「取組み」あるいは「取組み方」というところだろう。第二文に来て、「言っているらしい」のは「定冠詞つきの反ユダヤ主義者のこと」だけではなく、主語と述部を含む全体のことである。これを組み替えてみると「サルトル氏は、本書を通じて終始一貫、定冠詞つきの反ユダヤ主義者というのは一見してすぐにそれと分かる、またいわば、いつも活動を停止することのない、性情不変の人物のことを言っているらしい」となる（in action や the same kind of は、見られるとおり多少の敷衍によって論旨はさらに明瞭となろう）。ここできわめてはっきりしてくるのは、第三文は第二文の反証であるということである。このような結構こそがオーウェルの文章のダイナミズムでもある。それゆえに第三文冒頭の Actually は「ところが実は」と逆接の副詞として訳出するのが適当となろう。「現に」では逆に前文の傍証を導くもののように響いてしまうであろう。

次段落の「人間などというものはなく、存在するのは…異なった人間のカテゴリーだけだ、と彼は危うく言いそうである」（p. 437 : There is, he comes near to saying, no such thing as a human being, there are only different categories of men, . . . p. 453）というのには「人間」と「カテゴリー」との対比ではなくて「一個の人間」と「カテゴリー化された人間」との対比なのであるから「一個の人間などというものはなく、存在するのは…さまざまなカテゴリーの人間だけだ…」ということであろう。

少しあとの「ただ別の人間」（just another human being）は、「別の」という日本語には「異なる」の意もあって紛らわしいから「もう一人の人間」がよかろうし、「民族的系統」（racial origin）は明確に「人種的起源」とすべきであろう。最終段落の「民族的偏見」（Race prejudice）も「人種偏見」であるべきであろう。そうでないと nation と race がごちゃごちゃになるだろう。最後に出る「われわれと異質の種族」（a species of animal different from ourselves）も「われわれとは種を異にする動物」であろう。

このまま順を追うこととして、129「書評 — T・S・エリオット著『文化の定義のための覚え書』 pp. 439～441 : Review — *Notes towards the Definition of Culture* by T. S. Eliot, pp. 455～457) を取上げる。

「むろん彼は否定的に言っているだけである」(p. 439 : He is, of course, only speaking negatively. p. 455) とあるが、その前後に、エリオットがその著で「真の文明社会にはその基礎の一部として階級組織が必要であると論じている」(前) が、「高度文明を創造することのできるなんらかの方法があるとは主張していない」(後) のだから、ここの negatively は「否定的に」ではなくて「消極的に」であろう。英語では同じ語でも、その語の位置によって日本語では使い分けるのだから正しく使い分けるべきであろう。と、これは小さいが、第四段落に次のような文章が出てくる。

しかし、まことに奇妙なことだが、ここでエリオット氏は彼の主張のなかで最も激しい議論を呼ぶ可能性のあった点を見落としている。(p. 439 : 下線筆者)

But here, curiously enough, Mr. Eliot misses what might have been the strongest argument in his case. (p. 456)

下線部分は「自説の最も強力な論拠たりえたはずのことがら」であろう。訳者は argue とか argument という言葉をよく知らないらしく、次段落冒頭でも「エリオット氏が論じてもよさそうなことだが」(as Mr. Eliot might have argued, p. 456) と、どっちつかずで「エリオット氏が主張してもよかったのだが」の手前に留まっている。しかし次の段落の冒頭でも「エリオット氏はこの論法を利用してはいないが」(p. 440 : Although Mr. Eliot dose not make use of this argument, p. 456) と、三度目の正直で、ほとんどその語の意味に辿り着いているのだから、ここで振り返って最初に現われる場合の意味にも気づいてもよかったろうにと思う。

前段に戻って「ひとつの任用組織として、カトリック教会のように長期的に継続し、しかも変化の少ない」（p. 440 : lasting so long, and with so little change, as an adoptive organisation like the Catholic Church, p. 456）は「カトリック教会のような選任機構と同じように長期的に継続し、しかも変化の少ない」であろう。

133「ガンジーについての感想」（pp. 445～453）の終り近く「ソ連の大衆は、たまたま彼ら全体に同時に同じ考えが起こるならば、その時初めて市民的反抗を実践することができるだろう。その場合でさえ、ウクライナの飢饉の歴史から判断すれば、それはなんらの相違をももたらさないであろう」（p. 451 : 下線筆者）とある。それはそうに違いなかりう。下線部分の原文は it would make no difference なのだから、そうなるのだろう。しかし「状況はびくとも動かないであろう」ぐらいのことは言ってくれてもよからうに思うのは私の身勝手だろうか。

167「手記からの抜粋」（pp. 492～498 : Extracts from a Manuscript Note-book, pp. 509～515）に「問一帰宅する途中で何人もの捨て子の身体をまたいで通り、そのひとりだに助けてやらなかったとしたら、その後も以前と同じ人間であるのか？（中略）だれしもアジアで暮した経験のある者は、結局こうしたことをすでに行なってきたのだと M. M. は言う。たぶんあまり当てになる話ではなかりう。彼や私がアジアで暮していた頃、われわれは赤ん坊のことなどほとんど気にも留めぬような若者だったから」（P. 493 : 下線筆者）とある。下線部分の原文は Perhaps not quite true である。この文章、文脈の中でどうおさまりがつくのか、この訳文だと困ってしまう。M. Mの言うところが「あまり当てになる話ではな」と言うが、その後に続く文章はM. Mの言うところを一応事実として認めた上での、いわば自己弁護ではないのか。だとすると「まあ、そうとばかりも言えなかりう」というところではなかりうか。

* * *

改めて、この巻のはじめに戻る。

4 「書評— ショーン・オケイシー著『窓辺に響く太鼓』(pp. 12~14 ; Review — *Drums under the Windows* by Sean O'Casey, pp. 13~15) で racism を「民族主義」としているのは既に述べたとおり困る。この小篇中、このあとわんさと出てくる nationalism もすべて「民族主義」としているが、訳者はどちらも同じと考えているのだろうか。人種と民族を同じと考えているほど幼稚な知識人がいようとは考えられないが…。ついでだから言うが、この篇のおしまいに「平凡でよくない作品」とあるが、a bad or indifferent book なのだから「へたくそな、あるいは取るにも足りない本」だろう。

7 「ジャック・ロンドン著『生命への愛、その他』への序文」(pp. 21~28 : Introduction to *Love of Life and Other Stories* by Jack London, pp. 23~29) にもいくつか奇妙な訳がある。「少なくとも血を流させるには固いそののどもとに、食いついている」(p. 22 ; at any rate biting into its throat hard enough to draw blood, p. 23) というが、男が狼を食っているというのに、狼ののどというのはそんなに固くできているのだろうかと思う。「少なくとも血を抜き取れるぐらいにがっぷりとそののどもとに食いついている」のだろう。

「その作品の多くのものは緩急両様に出版された」(pp. 22 : much of whose work was produced hurriedly and at low pressure, p. 23) というのは「その作品の多くは急いで、しかもあせることなく作られた」であろう。

「しかしロンドンは、ほかのほとんどすべての予言者が間違っている数点¹において正しかったし、彼をすぐれた短篇作家にし、なんとなくたよれるような社会主義者にしている、まさにその性向ゆえに正しかった」(p. 22 : 下線筆者)。問題点に比べて引用は長くなったが、そうするほかなかった。下線1の原文は on several points で「いくつかの点で」であろう。下線2の原文は a doubtfully reliable Socialist だから「どうにかこうにかまずまずの社会主義者」とか「怪しいながらも社会主義者といえる存在」とかいうこ

とだろう。

「その政体にとっての疑わしい敵がぞうさなくいなくなる方法」(p. 23 : the way in which suspected enemies of the régime simply disappear, p. 24) は「その体制の敵と目される者らが文字どおり消え去る経緯」であろう。

「しかし『鉄足団』が有名なのは主として」(p. 23 : But the book is chiefly notable, p. 24) は「しかし『鉄足団』の注目すべきは…」であろう。また同文中「有産階級は…自らを巨大な集団に形成してゆくこともできるし、一種のゆがんだ社会主義を発展させることさえできるであろう」(p. 23 : 傍点筆者) の原文は the possessing class would be able to form itself into a vast corporation and even evolve a sort of perverted Socialism, p. 24) なのだから、少なくとも傍点部分の日本語は削除してしかるべきであろう。

「彼らだけが弱き人類とすべてをむさぼり食う獣との間に立っているというわけである」(p. 23 : 傍点筆者) の原文は they alone, . . . , stood between weak humanity and the all-devouring beast. だから、これでいいといえばそれまでだが、「間に立っている」では芸が無さすぎるだろう。やはり傍点部分は「間に立ち塞がって防いでいる」ぐらいまでは敷衍しておくべきであろう。

「私は寡頭執政者階級全体がもっているこの高度な倫理的正義にあまり重きを置くことはできない」(p. 23 : I cannot lay too great stress upon this high ethical righteousness of the whole Oligarch class, p. 24) は「私は寡頭執政者階級全体がもっているこの高度な倫理的廉潔はいくら重きをおいても置きすぎにはならない」であろう。

また、二度ほど出てくる「懸賞ボクサー」というのは日本語として耳になじまぬ言葉である。prize fighter は「プロボクサー」がよいのではないか。

9 「書評」— D・H・ロレンス著『プロシア士官, その他』(pp. 29~32 : Review — *The Prussian Officer and Other Stories* by D. H. Lawrence, pp. 30~33) の第五段落なかばに「情景をずっと見るのではなくて」(You do not look alone the sights) は「照準に合わせて見るのではなくて」が正し

い。同段落おしまいの「たぶん経験することがほんとうであろうが、そうでないかもしれない」(Perhaps it is true to experience, perhaps not;)は「たぶん経験的眞実にも合っているのでであろうが、そうでないかもしれない」であろう。全体の文脈からも、またそれに続く「しかし少くとも (筆者が傍点を付した部分が脱落しているが) それは感情的に眞実であり」(but at least it is emotionally true) との対応関係からもそうであろう。

次段落に「異常なほど長ったらしい作品」(an extraordinarily good, longish story) とあるのには驚いた。原文を掲げるだけで十分とは思いますが、あえていうなら「とびきり上等の、長めの物語」か。

この「牧師の娘たち」という作品の中で、二人の娘のうち「姉の方は比較的裕福な牧師と結婚するチャンスに恵まれる。偶然のことだが、その牧師は何か内蔵疾患にかかっている小男であり、大人というよりはませて気味の悪い子供のような、全く人間ばなれした男なのである」が、それに続いて

彼女は、多くの家庭がもっている標準に従って、まともに事を運ぶ。つまり、別の男と結婚するのである。(p. 31)

By the standards of most of the family she has done the right thing: she has married a gentleman. (p. 33)

これは、いうまでもなく「彼女は、その一家の大方の懐く基準に従って、まっとうなことをしたのである。つまり、一人の紳士と結婚したわけである」。 「別の男と結婚」などしたのでなくて、ちゃんとその「人間ばなれした」紳士と結婚したのである。こうなるとデタラメも休み休み言え、と言いたくなる。この文に続いて、妹は家をとび出して健康な炭坑夫と結婚すると記しており、次段落冒頭に、「この作品が『チャタレー夫人の恋人』と非常によく似ている」とも書いてある。少くとも『チャタレー夫人の恋人』の筋くらい知っていたなら、いくら勘が鈍くても、こんなひどい間違いはしようがなかつ

たろうと思われる。

* * *

この先一篇につき書くことは急速に少くなりそうである。また拾い上げる箇所もうんと疎らになる。そこで特に必要のないかぎりタイトル全部を写しとるのをやめる。そして、タイトルナンバーと当該箇所の日本語版、英語版それぞれのページを順に記すにとどめる。

14の「野外下水設備」(p. 46 : outdoor sanitation, p. 49) は「野外便所」であろう。「リードを過大にほめるのは容易でなかろう」(p. 48 : It would be difficult to overpraise Read, p. 51) は「リードをいくらほめてもほめすぎになることはまずなかろう」が妥当であろう。「いかなる種類の芸術家、批評家でさえも、ある一点を越えて「活動し続け」ようと努めることはおそらく誤りであろう」(同前) は誤りではなかろうが、「活動し続け」以下 (to endeavour to “keep up” beyond a certain point) を思い切って「ある一点を越えていつまでも無理して若いまままでい続けるのは」と、ちょっとくどいぐらい時間軸でのことだと強調しておく方が、次の文章との間に溝はなくなるだろう。429ページで、“keep up” を「時代遅れにならない」としているが、それもよいだろう。この文の直前に「広範な共感」(wide sympathies) という語句があるので、元の訳のままだと時間軸への転移が了解しにくいからである。同ページ「この瞬間に」(at this moment) は「現時点で」だろう。

16の「反対者は正直でもなければ聡明でもないと頭からきめこむ点で、カトリック教徒と共産主義者は似ている」(p. 56 : 下線筆者 : The Catholic and the Communist are alike in assuming that an opponent cannot be both honest and intelligent, p. 61) は「反対者は正直であると同時に聡明であることはできない…」ではないのか。

17の「これを再発行するほど先取的なイギリスの出版社がなかったことは

驚くべきことである」(pp. 65~66 : 下線筆者 : it is astonishing that no English publisher has been enterprising enough to reissue it, p. 72) とある。「先取的」とは奇異な日本語である。あるいは「サキドリテキ」と読むのだろうか。「センシュテキ」であろうか。「進取的」ならたしかにある。それよりも「やる気のある」といってくればよさそうだが、とってしまう。

同ページ「管理者」(“Guardians”)は「保護者」であろうし、「保護者」(Benefactor)は「恵与者」であろう。

やはり同ページ「要約するには複雑過ぎるが、この作品の筋はやや不十分で偶発事が目立つのだ」(it has a rather weak and episodic plot which is too complex to summarise)は「この作品の筋は複雑すぎて要約できないような、かなりぐらぐらした気まぐれなものだ」でよかろう。

24に「ブローガン氏は資本主義を弁護しており、イギリスが世界市場の割当を、国営産業よりも『自由』経済から奪還するさらによいチャンスをもつだろうということを示すのに、かなりの工夫を費やしている」(p. 88 : Mr. Brogan is defending capitalism, and he expends considerable ingenuity in showing that Britain would have a better chance of recapturing her share of the world markets with a “free” economy than with nationalised industries, p. 97) とある。ところどころ首を傾しげさせる言葉遣いがある。そもそも「割当」てられているものを「奪還」する必要があるか。資本主義を擁護している男が「自由」経済から奪還などといきまく必要があるのか。これは「ブローガン氏は資本主義を弁護しており、イギリスが世界市場から取り分を奪還するのに、国営産業によるよりも『自由』経済による方が見込みが大きいはずだということ、ずいぶん工夫して明らかにしている」というのであろう。

「しかし、彼と意見を異にする人が、共産主義とか女性中心主義とか、無神論とか平和主義とか、あるいは、彼のきらいな何かほかの主義について熟考させられるようになるのは、こういった方法によってではないのである」

(p. 89 : 下線筆者 : But it is not by these methods that anyone who is not in agreement with him already will be brought to think twice about Communism, feminism, atheism, pacifism, or any of the other -isms that Mr. Morgan dislikes., p. 98) とある。たしかに「熟考」させるのではあるが、「熟考」して、ますます信念が堅くなつてはなんにもならないので、せめて「再考」とか「考え直す」という日本語ならば、少しは曖昧さも薄らぐであろう。「ためらう」とか「眉に唾つける」くらいまで言ってもよかろう。一工夫あるべきところ。また舌のもつれるような受身はなるべく避けたがよかろう。「彼と意見を異にする人に…考え直してみる気にさせる」といったところか。また feminism は私自身適訳を知らぬが、「女性中心主義」はまずかろう。「女性解放論」だろうか。

57の「以上の論調から、あるいは私がスウィフトに反対で、彼を論駁し、さらには卑下さえすることが私の目的であるかのように思われたかもしれない」(p. 201 : 下線筆者 : From what I have written it may have seemed that I am *against* Swift, and that my object is to refute him and even to belittle him., p. 220) の「卑下」は自分について言うことで belittle にはあてはまらない。「卑小化」というべきところ、うっかり日本語をまちがえたのであろうが、やはり読者は戸惑う。

76の「悲劇的状況というのは、まさに美德が勝利を収めず、しかもなお人間が、それを破滅させてゆくもろもろの力よりも高貴だと感じられる時に存在するものなのである」(p. 276 : 下線筆者 : A tragic situation exists precisely when virtue dose *not* triumph but when it is still felt that man is nobler than the forces which destroy him., p. 293)。「それを破滅させてゆく」とは何を破滅させてゆくのか。原文に him とあるのだから「人間」のほかになかろう。それならば「それ」ではなくて、平明に「人間を破滅させる」とすべきであろう。

90の注にある漫画絵葉書の文句の訳。

男の客 「文字を書く道具はありますか？」

若い女店員 「時々もじもじすることもありますわ」

Male Customer : 'Do you keep stationery, miss?'

Young Lady Assistant : 'Sometimes I wriggle a little.'

これは、たしかにこれ以上の訳は無理というものであろう。むしろ「文字」と「もじもじ」で一工夫あったと賞すべきですらある。しかし、ありていは発音が同じだから stationery を stationary と受けとって「じっとしたまままでいるのか？」に対して、こう答えたのであった。困ったことにそれは日本語には置き換えようがない。それは分かるが、このままだと訳者が楽しんだだけで読者には全く分からない。ごてごてするようでも、そしてこれ自体が注であっても、やはり注が必要であったろう。

118はオスカー・ワイルドの『社会主義の下における人間の魂』の書評である。ワイルドからの引用句「他人のために生きるというさもしい必要性」(p. 410 : "the sordid necessity of living for others" ., p. 427) という訳には恐れ入る。訳者は transferred epithet などというものを全く知らぬげである。理くつの上では the necessity of living sordidly であるけれども、わざとこういえば印象が鮮やかになる、とかなんとか教室で説明して、ちょっと照れ臭くなるしろもの。漢詩にも倒装法などという同種のものがあり、芭蕉の句にも「髭風を吹いて暮秋歎ズルハ誰ガ子ゾ」とか「鐘消て花の香は撞く夕かな」などがあるとされる。当然翻訳としては「みじめたらしく他人のために生きねばならぬ必要性」であろう。

「今日では、こんな楽観的な予想はやや痛ましい判断となる」(p. 410 : Today, these optimistic forecasts make rather painful reading., p. 427)。いったいなんのことか? 「今日では、こんな楽観的な予想は、読むのも辛いことでさえある」だろう。

「明らかに何か狂ってしまっている」(同前 : Evidently something

has gone wrong., Ibid) は「何か狂ってしまっているらしい」に、「少なくともワイルドのユートピアは近づいてはいない」(同前: at any rate Wilde's Utopia, is no nearer., Ibid) は「…近づいているところではない」と、折り返し正しくやってもらいたい。

「粗悪な見解」(p. 412: harsh outlook, p. 428) は「きびしい見方」に、「おそらくは限定された目的のために確立された独裁」(同前: A dictatorship supposedly established for a limited purpose, Ibid) は「限られた意図のために樹立されたはずの独裁」に、「したがって、ワイルドのこの小冊子や同類の作品…には価値があるのである」(同前: Wilde's pamphlet and other kindred writings . . . consequently have their value., Ibid) は「ワイルドのこの小冊子や同類の…には、だからこそ独自の価値があるのである」に。

122の「有利なテーマ」(p. 423: a fruitful theme, p. 439) は「実のり多いテーマ」に、「カトリック教徒」(同前: a Catholic convert, Ibid) は「カトリック回心者」に、「悪意ある暗示」(p. 424: fairly sinister suggestion, Ibid) は「相当に腹の黒いほのめかし」に、というところ。

123の「手工業労働者」(p. 429: the manual workers, p. 445) は「筋肉労働者」が普通だろう。

「人をせせら笑うような優越意識で、そして実際、一世代前の富裕階級の人にはなかった教養ある情操を、幼い時からもっていたという意味合いをこめて、イートンあるいは近衛歩兵第一連隊のことを書く方が、どんなに容易であったろうか」(p. 430: How easy it would have been to write of Eton or the Grenadier Guards in a spirit of sneering superiority, with the implication that from earliest youth he was the holder of enlightened sentiments which, in fact, no comfortably-placed person did hold a generation ago., p. 446) はもう少し並べ方を変えたらと思うのみ。

「実際、一世代前の富裕階級の人にはなかった進歩的な感情を、さも幼い時からもっていたといわんばかりに、せせら笑って見くださうような調子で、

イートンあるいは…」と、私ならばしたいというまで。

これで第四巻を終わる。 (つづく)

(1989. 7. 14 受理)